

# 親鸞における転成の意味

石 田 充 之

一

親鸞の浄土真宗の信仰内容を極めて意味深く示すものに「転成」といつたことがある。それは極めて仏教的な体験内容を親鸞的な信仰を以て表現したものとも考えられる。主著『教行信証』行巻の一乗海の釈下に、「海と言ふは久遠よりこのかた、凡聖所修の雑修雑善の川水を転んじ、逆謗闡提の無明の海水を転じて本願大悲智慧真実恒沙万徳の大宝海水と成る。良に知んぬ、経に説いて煩惱の氷解けて功德の水と成るが如し。」と説明する如き内容である。自力の雑修雑善の川水、五逆、謗法、一闡提といつた極悪の無明海水を転じて阿弥陀仏の本願大悲智慧真実の海水と改変するという意味である。その前後の叙述によれば、本願力絶対他力により一切の人間の相対差別、人間の存在性を根源的に弥陀大悲智慧真実海と改変してゆくという意味である。その改変転成は喩えば、人間の相対差別相対相対の迷妄の煩惱極悪の氷が解

けて、弥陀の大悲智慧極まる真実の証りの功德の水となる如くであるというのである。「和讃」の曇鸞讚に、「無碍光の利益ヨリ 威徳広大ノ信ヲエテ カラス煩惱ノコホリトケ スナワチ菩提ノミツトナル。罪障功德ノ体トナル コホリトミツノコトクニテ コホリオホキニミツオホシ サワリオホキニ徳オホシ。」と述べる如き意によれば、煩惱罪障の氷が菩提功德の水となるのは、無碍光阿弥陀仏の他力廻向の信を得せしめられることによつて、実現されてくると示す意向は明らかである。さらに、その信巻の横超断四流釈下に、「断と言ふは往相の一心を發起するが故に、生として当に受くべき生無し、趣としてまた到るべき趣無し。已に六趣四生因亡じ果滅す。故に即ち頓に三有の生死を断絶す。故に断と曰うなり。」と示し、証巻の始めに、「往相廻向の心行を獲れば即の時に大乘正定聚の数に入るなり。」と明かす如き意を顧みれば、仏の本願力他力の往相廻向の信心の一心をえせしめられる即時に六趣四生の罪障の因果滅して、煩惱即菩提といつ

た大乘の仏果を得べく正しく決定づけられると示すのである。逆謗闡提の無明海水が大悲智慧真実大宝海水と転成されるのは他力の信を得せしめられる信一念即時にあるのである。又行巻(す)の所頤によれば、転成の力である本願力他力というのは、転成の願行を具足する名号南無阿弥陀仏に外ならないのである。同じく曇鸞讚に、「名号不思議ノ海水ハ逆謗ノ死骸モトトマラス 衆悪ノ万川婦シヌレハ 功德ノウシホニ一味ナリ。」と歎述される意向など、その意は明らかである。

かように、転成を名号本願力他力の救済活動において語り、信一念即時の救済決定の内容として説き、逆謗の極悪者の煩惱即菩提なる大乘無上の仏果獲得の決定づけの契機において説き示す所に、親鸞特異の極めて仏教的な信仰内容の特色が盛られていることを注目させられる。それは、「初心の弁道すなはち本証の全体なり」(正法眼蔵弁道話)などと説く、道元の仏教体験の把握の如き内容と異なるのみならず、同じ法然門下として他力の救いを強調する浄土宗西山派証空などに出版する他力弘願仏体名号即行・信一念即便往生の体験の仕方などとも可なり異なる。

## 二

信の一念に本願力他力により、雑修雑善の川水・逆謗闡提

の無明海水を本願大悲智慧海水と転成するとは、どういう内容のことを意味するのか。それは煩惱の氷が解けて功德の水となるが如くであると喩えて説明される。しかし、そのような説明の内容は人間存在、現象存在一般を如何に把握してゆこうとしているのか。衆悪の万川とか、逆謗の死骸・逆謗闡提の無明海水・煩惱の氷といえ、そこには、明智をもたない迷妄なる五逆・謗法の煩わしい苦悩のみちみつる争い相尅する衆悪の氷の如き世界が見出されてくる。そのような迷妄の相尅界が、本願大悲智慧大宝海水・功德のうしほと一味ならしめられるというのは、相尅界が明智の極まる大悲功德の全く相尅のない一味平等界たらしめられるという意味である。迷妄の相対差別相尅界が明智の平等界たらしめられるという意である。煩惱罪障の氷がとけて菩提の功德の水となると喩え説明される意向によれば、氷も水も、水という本性、存在性は変らないが、水を水と真にみる明智をもたない迷妄界においては、水を氷の如く冷酷な相尅界たらしめるのであり、迷いを除かれれば、水は水として一味平等の真存在たらしめられる、といった如きことを意味するのである。したがって、ここでは、転成ということは、迷妄を去れば、一切の存在は迷妄的存在性を転じて存在の真姿を現成されてくることを意味されているわけで、存在は一つの存在にすぎないが、存在を真にみるか、みないかといったあり方の場にお

いて、転成といつたことをいわれていることは、いうまでもなく明らかである。それは、仏教一般に常識的にいわれる転迷開悟といつた基本路線の上において打出されている実践的な見解とみなされうる。

しかし、親鸞の場合、逆誘闡提の相尅界が本願大悲智慧真実の大宝海水と転成されるというのは、どのような存在構造の内容性を特に意味しているのであるのか。上に引用した曇鸞『和讃』の一連のものによると「本願円頓一乗ハ逆悪摂スト信知シテ 煩惱菩提体無ニト スミヤカニトクサトラシム。往相ノ廻向トトクコトハ 弥陀ノ方便トキイタリ 悲願ノ信行ニシムレハ 生死スナハチ涅槃ナリ。」などと示される。かような所見によれば、本願大悲智慧真実大宝海水は、自他对立相尅の煩惱界・生死対立別視の迷妄を、煩惱即菩提・生死即涅槃なる一味平等の悟界へと絶対超越せしめる転成の構造内容をもつことが理解される。他人に自己を対立せしめ、死に生を対立せしめて、万人が自己の生といつたことのみで固執して相互対立を極めてやまない相尅界を、自己は他人に縁つてあり、他人は自己に縁つてあり、生は死に縁つてあり、死は生に縁つてあらしめられつつ、自他縁生して相互に無数に深く関係しつつ、時時刻々生より死へと流転し変化してやまない縁起無我的な存在者たる意味で、迷妄の煩惱、生死界に即して、煩惱・生死の水をとかして、煩惱即菩

提・生死即涅槃なりと絶対超越の縁起無我的な水の真存在性を明かに体認せしめられてゆく、といつた転成の内容構造である。かような煩惱即菩提・生死即涅槃と体認する万象の縁起因縁生なる無我的な真存在性についての親鸞の理解の受容の一端は、前引の行巻で、曇鸞の『論註』などにより、本願力他力の名号が衆生の称名となり衆生の一切の無明を破し転じて成仏の志願を満足せしめるといつた意向(㊦㊧)などを明かすに当つて、特に、『論註』の始めの一心願生の説明下の如きにおいて、『中論』などにより、諸法縁起因縁生の生に徹底するということが天親のいう願生の本義なのだ、と説明する如き理解を引証する(㊦㊧)意向などに顧みるも明らかである。又親鸞のよく引用する『往生要集』の、大文第四の第三作願門下(上末㊦㊧)や同第五の第四止悪修善下(中本㊦㊧)、又は大文第六の第二臨終行儀の下(中末㊦㊧)などに『中論』などを引き、煩惱即菩提・生死即涅槃・一色一香無非中道・円融無礙・氷水一味を力説する如き意向などを汎く顧慮するならば、さらに、その辺の理解を深からしめられうる。その煩惱即菩提・生死即涅槃と示す縁起因縁生の場には、日本天台的な一色一香も中道円融無礙に非ざることなしといつた如き意味内容もみていることが考えられうる。行巻の最初に、本願力名号を「極速円満す、真如一実の功德宝海なり。」と示し、一乗海積下に、「本願一乗海を按ずるに、円

融満足極促無礙絶対不二の教なり。」と明かし、信巻に、信を「極速円融の白道、真如一実の信海なり。」とか、「大悲円融無礙の信心海なり。」などと説示す意向によれば、本願力他力の救いの活動性において、又それを素順に受けとめる信の内容性において、転成される縁起因縁生の場が如何に天台的な円融無礙の場の理念的親鸞的な再体認を以て内容づけされているか、さらに具体的に理解せしめられうるであろう。そこには、さらに汎くは、親鸞の『教行信証』などによく依用する宋代の浄土教者元照の「観経疏」の初めに示す、事理円融生即無生論などの新しい影響の再体認なども想起されてくる。

かようにして、逆誘闡提の相對無明界が本願大悲智慧真実大宝海水と転成されるということは、迷妄の相對相對立的存在が、相對相對立のそのままで、そこに即して相互に縁起因縁生し円融無礙となる真存在へと絶対的に超越せしめられる如きことを意味していることを了解せしめられうる。

### 三

雑修雑善の川水を含めて逆誘闡提の無明海水たる我々中心の世界は、「兎毛羊毛ノサキニイルチリハカリモ ツクルツミノ宿業ニアラストイフコトナシ。」と『歎異鈔』に示す如き絶対的宿業悪の世界である。自らの力を以つては絶対的に打開することの不可能な穢悪の世界である。それは相反相

尅すること極まりなき世界である。生死即涅槃・煩惱即菩提界は、生と死の二者が縁起円融して二者即一者となり、自と他との二者の相對する煩惱界が縁起円融して二者即一者となり、又同時にそれぞれ、逆に一者即二者と縁起する、それは、二者即一者、一者即二者となる如き円融縁起の絶対的超越界である。それは相反相對（二者）即無相反無相對（一者）、無相反無相對（一者）即相反相對（二者）を現成する如き円融縁起界である。それは、『教行信証』の証巻に、滅度、常樂、畢竟寂滅、無上涅槃、無為法身、実相、法性、真如、一如、と示される如き証界の真存在性に即応する場であろう。かような真如の真存在性に全く背反する世界が逆誘闡提の無明海水の場である。真如の真存在界と逆誘界は全く相反し、両者の間にかげ橋はない。しかし、逆誘闡提の相對界は迷妄極まる極悪界であるが、生死即涅槃・煩惱即菩提界は相反相對即無相反無相對・無相反無相對即相反相對と、相反相對界を包容（内在）しつつ絶対超越する真存在界である。したがって、そこには、本願大悲智慧真実大宝海水と迷妄界全体を転成する、転成力を必現せざるを得ない無我的縁起円融界の救済的存在性、かけ橋があらしめられる。

円融縁起界が、自において他を考え、他において自を考えるを得ざる自利即利他界であり、又生において死を、死において生を認容せざるをえないかような無固定的な真存在界

として、自の生のみしか実践的に考え得ざる如き相反相尅界を、自我欲望の執着にのみ固定する迷妄極まる世界と見做して、利他救済活動、他力本願力転成活動を現成してゆかざるを得ないことは必然的なことである。円融縁起界が二者（自由）即一者（平等）・一者（平等）即二者（自由）を現成する自由即平等界とすれば、相反相尅界は、二者（自由）たらんとして一者（平等）たらんと欲し、一者（平等）たらんとして二者（自由）たらんとする、二者たることと一者たることとが恒に矛盾し、自由であることと平等であることが常に矛盾して、矛盾極まりなくさ迷う世界ともいいうる。かような矛盾の起る根源的原因是は、二者即一者、一者即二者を現成する如き縁起的真存在性に全く背反して、相互が自己の生のみに固定的にさ迷い執着する所に深く孕まれる。

親鸞においては、かような超越して内在的である円融縁起的真存在界と相尅縁起的迷妄極悪界との関係において転成が語られるのである。したがつて、親鸞は『唯信鈔文意』において、法照の『五会法事讚』の「如来尊号甚分明……観音勢至自来迎」の句を釈するに当つて、「如来尊号」たる名号本願力の救済摂化を明らかにしつつ、「自来迎トイフハ 自ハミツカラトイフ。……ミツカラツネニトキヲキラハス トコロヲヘタテス真実信心ヲエタル人ニ ソヒタマヒテ マモリタマフユヘニ ミツカラトマウスナリ。マタ自ハヲノツカラ

親鸞における転成の意味（石 田）

トイフ ヲノツカラトイフハ自然トイフ自然トイフハシカラシムトイフ シカラシムトイフハ行者ノハシメテトモカクモハカラハサルニ過去今生未来ノ一切ノツミヲ善ニ転シカヘナストイフナリ。転ストイフハ ツミヲケシウシナハスシテ善ニナスナリ。ヨロツノミツ大海ニイレハ スナハチウシホトナルカコトシ。弥陀ノ願力ヲ信スルカユヘニ 如来ノ功德ヲエシムルカユヘニ シカラシムトイフ。ハシメテ功德ヲエントハカラハサレハ自然トイフナリ。」等と自然法爾の転成救済を力説するのである。名号本願力他力の救済活動は根源的に円融縁起的な真存在よりの必然的な顕現活動なる故、円融縁起的な無我的真存在性が自然法爾の存在とみなされうると同時に、その必現転成の名号本願力の救済活動も自然法爾の活動とされる。相尅縁起界の煩惱の「ツミヲケシウシナハスシテ」、煩惱即菩提と絶対超越改変して「善ニナス」という転成なる故、転成は本質内容的に必然である自然法爾である。相尅縁起界の「行者ノハシメテトモカクモハラハサル」「ハシメテ功德ヲエントハカラハサレハ」といつた、円融縁起界必現の本願力名号活動の転成なる故、転成方法も極めて必然であり自然法爾である。その『一念多念証文』に、「コノ要門仮門ヨリモロ／＼ノ衆生ヲス、メコシラヘテ本願一乗円融無碍真実功德大宝海ニヲシヘス、メイレタマフカユヘニヨロツノ自力ノ善業ヲハ方便ノ門トマウスナリ。イマ一乗

トマウスハ本願ナリ。円融トマウスハヨロツノ功德善根ミチ  
 〳〵テカクルコトナシ自在ナルコ、ロナリ。無碍トマウスハ  
 煩惱悪業ニサヘラレスヤフレヌヲイフナリ。真実功德トマウ  
 スハ名号ナリ。一実真如ノ妙理円満セルカユヘニ大宝海ニタ  
 トヘタマフナリ。……宝海トマウスハ ヨロツノ衆生ヲキラ  
 ハス サハリナクヘタテス ミチヒキタマフヲ大海ノミツノ  
 ヘタテナキニタトヘタマヘルナリ。コノ一如宝海ヨリカタチ  
 ヲアラハシテ法藏比丘トナノリタマヒテ無碍ノチカヒヲオコ  
 シタマフヲタネトシテ阿弥陀仏トナリタマフカユヘニ報身如  
 来トマウスナリ。……コノ如来ヲ方便法身トハマウスナリ  
 方便トマウスハカタチヲアラハシ御ナラシメシテ衆生ニシラ  
 シメタマフヲマフスナリ。」等と示される意向によれば、「カ  
 タチヲアラハシ ミナラシメシテ」の本願力名号救済摂化の  
 顕現ということが、如何に一実真如の円融縁起の眞存在が相  
 尅縁起の衆生界の存在性に応じ入りこむ自然法爾の救済活動  
 相であるか、想察しうる。「一実真如ノ妙理」が絶対超越的円  
 融縁起界の眞存在界として、『唯信鈔文意』に、法性法身・  
 「イロモナシカタチモマシマサス」と示す存在であることは  
 いうまでもない。それだけに、円融縁起界それ自体は、親鸞  
 にとつて、全くの「あるものがあるようにあらしめられる」  
 自然法爾界なのである。その自然法爾界の、相尅縁起界へ  
 の、必然的な自然法爾なる救済活動が、本願力名号の救済活

動であり、そこに現成されるものが、親鸞の意味する転成と  
 いうことで、転成は極めて自然法爾なる転成ということ在意  
 味する。

その最後晩年の作とも見られる『自然法爾の文』におい  
 て、「獲得名号自然法爾」の句を釈したものと理解される下  
 で、南無阿弥陀仏なる名号の摂化活動が因果に亘つての救済  
 活動であることを説示すと共に、「スヘテ人ノハシメテハラ  
 ハサルナリ」との自然法爾ということを力説し、「弥陀ノ御  
 チカヒノモトヨリ行者ノハカラヒニアラスシテ 南無阿弥陀  
 トタノマセタマヒテムカヘムトハカラセタマヒタルニヨリテ  
 行者ノヨカラムトモ アシカラムトモオモハヌヲ自然トハ  
 マフスソトキ、テ候、御チヒノアウハ無上仏ニ ナラシメム  
 トチヒタマヘルナリ。無上仏トマフスハカタチモナクマシマ  
 ス。カタチノマシマサヌヘニ自然トハマフスナリ。……カ  
 タチモマシマサヌヤウヲシラセムトテ ハシメテ弥陀仏トソ  
 キ、ナラヒテ候。ミタ仏ハ自然ノヤウウヲシラセムレウナ  
 リ。」等と示される意向などによれば、本願力他力名号の救  
 済活動が如何に自然法爾の活動であるかということを明かに  
 すると同時に、転成ということが、如何に自然法爾というこ  
 とを、その本義としておるか、その理解をより深からしめら  
 れうる。

かようにして、本願力他力名号による転成、信一念即時の

転成ということには、極めて、自然法爾の転成という意味を強調していることを理解せしめられるが、それは、内容的には相対縁起の最悪界より円融縁起の無上界への絶対的超越を意味するわけで、その超越転成が如何に徹底した超越を意味しているかに注目させられる。それは、徹底した自然法爾の転成ということを意味すると同時に、徹底した超越転成ということを意味内容としている。親鸞にとつて、「行者ノハシメテハカラフ」「人ノハシメテハカラフ」相対縁起界は極めて我欲的な不自然界であり、「如来ノハカラフ」絶対超越的円融縁起の極めて無我的な躍動こそが自然法爾なのである。したがつて、逆謗の煩惱無明海を大悲智慧真実の煩惱即菩提海と転成するに当つて、自然法爾の転成ということを強調する程、円融縁起の無我的躍動、「如来ノハカラフ」、本願力名号他力の救済を力説するわけで、転成が徹底した絶対超越的転成を意味することは必然的である。自然法爾の転成を力説する程、転成の超越性が強調され、転成の絶対的超越性を力説する程、自然法爾の転成といつたことが強調されざるを得ないのである。親鸞は、転成ということに、かような意味内容をみていることが考えられる。そこには、大乘仏教的な基本路線、特に日本天台的な基本線が親鸞的な再認の把握により深く潜在させられている。自然法爾の転成ということも、それが宗教的な仏教的体験の場で取上げられていると

はいえ、相対縁起的な存在現象性一般に深く広く拘ることを考える場合、自然科学的な対象としての自然現象性一般にも汎く拘り合いをもつことが考えられる。かように本願力他力による信一念の絶対的超越転成を力説するとはいえ、信仰者の現実としては成仏することに決定づけられる正定聚の人たらしめられるという意味であつて、肉体の消滅する死に至るまで信仰者自身は相対縁起界中の極悪者であるとの主張は終始一貫していることを注意しておく度い。極悪者の現実のまままでの成仏への決定づけの内省体験・安定感が信一念転成の内省的自覚である。その辺の意向は『教行信証』信巻・『一多証文』の二河譬釈・『述懐和讃』などに顧みられたい。それ程、相対縁起者の内省は徹底して深い。そこには、相対縁起的な現象の全存在に拘つての限りない宿業悪的汚染への悲歎と、それに深く拘り合い根源的に無限に全存在を浄化しつつある円融縁起的な救いの躍動への歓喜とが相交錯せしめられて、永生への真実の道が開かれている。

(昭和四十五年度文部省科学研究費・総合助成費による)。